

11 松ヶ岡の元祖は東山口出身だった

筆 者 服部 光子

1・初めに

掛川市指定文化財である松ヶ岡（旧山崎家住宅 掛川市南西郷 838）の大元を築いた山崎才兵衛（万右衛門）の出身が東山口であるということは意外と知られていません。

東山口の住民として是非知って頂きたいとの思いでこの紹介文を書いています。

松ヶ岡の大元を築いた山崎才兵衛（万右衛門）の出身は東山口の山崎家です。慶雲寺の碑（下の写真）には牛頭に遷り住んだとの記述があります。寺ヶ谷という説もあります。

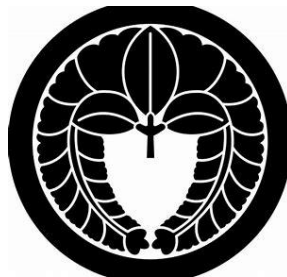
牛頭・寺ヶ谷の山崎家の家紋は「下り藤」であることがそれぞれお墓を尋ねてみると分かります。両者共に慶雲寺（掛川市伊達方 223）の檀家だそうで松が岡の初代・才兵衛（万右衛門）の功績を記した碑は慶雲寺の門の手前にあります。（下の写真）



— 寺ヶ谷・山崎家の家紋

牛頭・山崎家の家紋

西町・松が岡の家紋



慶雲寺にある碑 ↓

松ヶ岡所蔵 碑の拓本 →

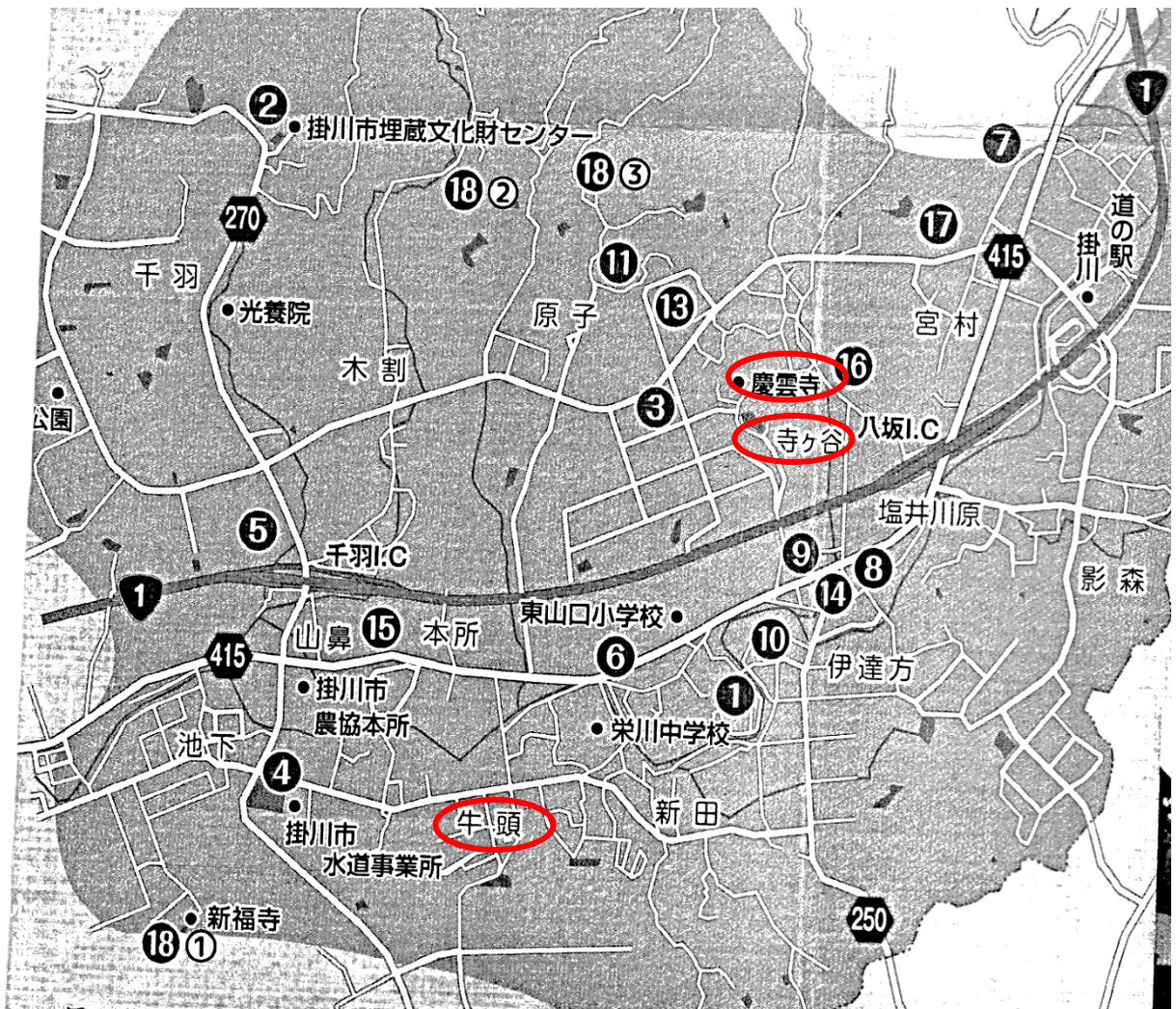


この碑の拓本（右写真）は松が岡に飾られており、そこには「宝暦5年（1755年）3月26日 新脩山崎才兵衛法名立戒定地居士 配小澤氏法名釣無乗竿大姉合葬墓 宝暦3年（1753年）8月29日

（新しく修復した才兵衛と連れ添い小沢氏合葬の墓）」と書かれ、



2・牛頭と寺ヶ谷の位置関係



東山口の地図 東山口まちづくり協議会作成「東山口のみどころたずねどころマップ」一部

3・牛頭の山崎家

山崎氏鼻祖の墓（牛頭）



牛頭 山崎家の墓と家紋



牛頭の山崎家については「掛川市史」やその他の書籍に次のような記述が見られます。
 ○観応2年（1351年）伊達藤三景宗（伊達縫殿助）が今川氏に軍忠状（自分の軍功）を提出した結果、天王森（諏訪神社）に黒印が下され、牛頭村を神領として拝領した。牛頭天王社の鍵取りは牛頭村の山崎彦右衛門が務めることとなった。

○応仁元年（1467年）東軍今川（堀越）貞延軍と西軍横地軍が佐夜中山を中心に合戦した時、今川貞延は敗れて池下鞍骨の池で自害（没年諸説あり）牛頭村の庄屋・山崎彦右衛門は祠を建て祀った。 ➡ その祠は今もあり（下写真）毎年牛頭の人たちが祀っているということです。

4・寺ヶ谷の山崎家

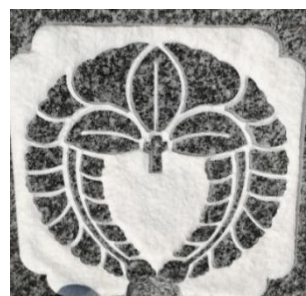
寺ヶ谷 山崎家墓の跡



慶雲寺にある墓



寺ヶ谷 山崎家家紋



定地君碣陰記の碑 慶雲寺（寺ヶ谷）



慶雲寺



慶雲寺山門



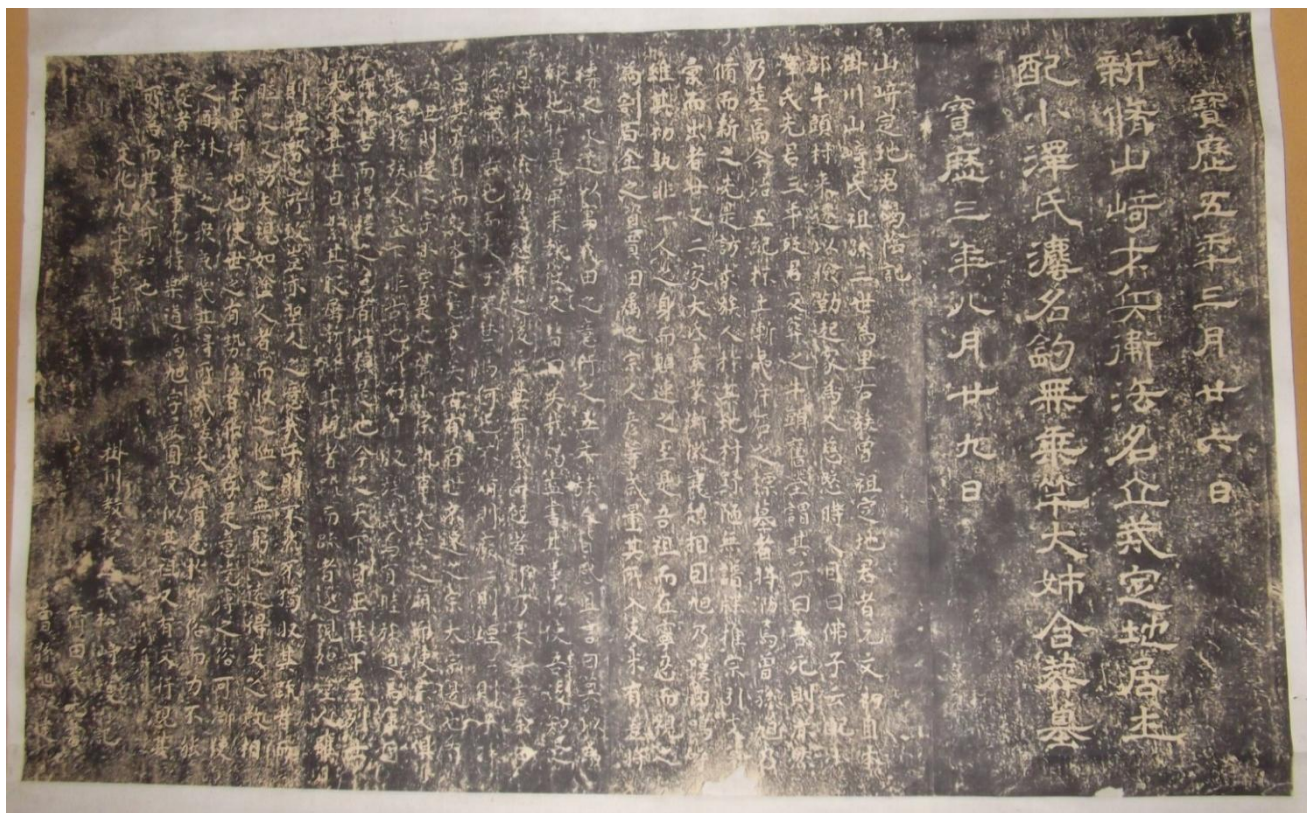
慶雲寺山門近くにある碑



寶曆五年三月廿六日 新脩山崎才兵衛法名立戒定地居士

配小澤氏瀧名鈞無乘竿大姉合葬墓 寶曆三年八月廿九日

5・松崎慊堂遺文著 「山崎定地君碣陰記」 松ヶ岡所藏



解 読

寶曆五年（一七五五年）三月二十六日

新脩山崎才兵衛法名立戒定地居士

配小沢氏法名鈞無乘竿大姉合葬墓

宝曆三年八月二十九日

山崎定地君碣陰記

掛川山崎氏祖孫三世為里右族、曾祖定地君者元文初自本郡牛頭村來遷、以儉勤起家為人慈愍、時人目曰佛子云、配小澤氏先君三年歿、君反葬之牛頭舊塋謂其子曰、吾死則亦然、乃塋焉、今殆五紀、坏土漸夷、片石之標墓者將泐焉、曾孫旭乃脩而新之、先是訪求族人於其地村野陋無譜牒推宗引支茅彙而出者廿又二家、大氏素業漸微衰頽相回、旭乃嘆曰、嗚呼維其初孰非一人之身、而顛迷之至是、吾祖而在寧忍而視之、為割百金之資、買田屬之宗人彦等、歲量其所入支米有差、將傳之永遠以寓義田之意、行之五年族人皆感且言曰、莫以為報也、於是爭來執役、又皆曰美哉碣蓋書其事、^{すなは}將使吾後知是恩出於儉勤慈愍者之後、冀其有感而起者耶、乃來謀書、余曰修墓非古也、而 ^{すなは}ち夫子は禁ぜず。何也、不修則廢之則埋之、則子孫忘其所自而敦本之意衰矣、古有百世不遷之宗太宗是也、有五世則遷之宗小宗是也、禮小宗執事太宗之廟、而使宗支俱來役族人墓下非古也、然而有收族義焉、有睦族道焉、事固有非古而得禮之意者、此類是也、今之天下自王侯下至士大夫其生日繁、其服屬漸降、其親者疎、而疎者遂視如塗人、雖名則現勢之所致、豈亦聖人之意哉、子則不然、不獨

収其疎者而睦之、又訪夫視如塗人者而収之、恤之無窮之遠、得失之数相去果何如也、使世之有勢位者能少存是意、澆薄之俗、可漸使之醇、林林之衆、庶幾其得所哉、嗟夫、子有志於斯俗而力不能變者、於是事也、特樂道焉、旭字晨園、克似其祖、又有文行視其所為、而其人可知也、

文化九年春正月 掛川教授益城松崎復記

読 み

山崎定地君碣陰記

掛川山崎氏祖孫三世、里の右族たり。曾祖・定地君は元文初め本郡牛頭村より来り遷る。
儉勤をもって家を起こし人となり慈愍、時人目して仏子と曰ふと云ふ。配・小沢氏先君に先んずこと三年にして歿す。君反りてこれを牛頭の旧塋に葬る。その子に謂ひて曰く、吾死すれば則ち亦然れ。乃ち葬る。今殆んど五紀。坏土漸く夷なり、片石の標墓は將に泐せんとす。曾孫・旭乃ち脩してこれを新たにす。これに先んじ族人をその地に訪ひ求む。村野陋く譜牒なし。宗を推し支を引く。茅め彙めて出づるは二十二家、大氏の素業漸く微へ衰頽相回る。旭乃ち嘆きて曰く、嗚呼維れその初め孰か一人の身にあらざらん。而るに顛迷のここに至る。吾祖而ち在せば寧くんぞ忍びてこれを視んや。為に百金の資を割り田を買ひ、これを宗人の彦等に属ぬ。歳にその入る所を量り、米を支り、差を有す。將にこれを永遠に伝え以てこれを義田に寓す。意ふにこれを行ふこと五年、族人皆感じ且つ言ひて曰く、以て為報ゆること莫きなり。ここに於いて争ひ来たりて役を執る。又皆曰く。美なるかな。碣、蓋ぞその事を書かざる。將に吾が後をしてこの恩の儉勤慈愍の者の後に出づるを知らしめんとす。冀それ、感じて起つ者有らんことを。乃ち来りて書を課る。余曰く、墓を修するは古にあらざるなり、而ち夫子禁ぜず。何ぞや、修せざれば則ちこれ廢れ、則ちこれ埋し、則ち子孫その自る所を忘る。而ち本を敦ぶの意衰ふ。古に百世不遷の宗あり。太宗これなり。五世則ちこれを遷すの宗あり。小宗これなり。礼は小宗太宗の廟を執事す。而して宗支をして俱に来たりて族人の墓下に役せしむ。古にあらざるなり。然して族を収むるの義あり。族を睦するの道あり。事は固より古にあらずして礼の意を得る者にあり。この類これなり。今の天下、王侯より下は士大夫に至る。その生日に繁し。その服属漸く降る。その親疎ければ、而ち疎き者は遂に視ること塗人の如し。則ち現勢の致す所と雖も、豈にまた聖人の意ならんや。子は則ち然らず。独りならずその疎き者を収めてこれに睦ぶ。又、夫の視ること塗人の如き者を訪ねてこれを収め、これの無窮の遠きを恤み、得失之数相去りし果て何如ならむ。世の勢位有る者をして少しくこの意存するを能くせしめれば、澆薄之俗漸くこれをして醇ならしむべし。林林の衆、庶幾その所を得んことを。嗟夫、子かかる俗に志を有し、力変える能はざるはこの事に於いてなり。特に道を楽しまんや、旭字は晨園、克くその祖に似る。又、文行を有す。その為す所を視てその人を知るべし。

文化九年春正月 掛川教授益城松崎復記

意 訳

山崎定地君碣陰記（功績を顕彰する記）

掛川山崎氏の祖孫（先祖と子孫）三世は里の勝れて勢力ある家柄であった。曾祖・定地君は元文初め（一七三六～）本郡牛頭村から移って来た。無駄をせず仕事に励み、家を起こし、人柄は慈しみ深かった。時の人は彼のことを認め「仏子」と言ったということだ。配偶者の小沢氏は先君に先立つこと三年にして亡くなった。君は戻ってこれを牛頭の古い墓に葬った。その時、その子にこう言った。「私が死んだら、またこのようにしなさい。」そういうことで同様に葬った。今ほとんど五代。丘（墓のある地）はだんだん平らになり朽ちてきた。片石の標墓は今にも割れそうであった。曾孫・旭はそういうわけで修復してこれを新たにした。これに先立ち一族の人々をその地に訪ねた。村の田野は狭苦しく系図などもない。宗家（本家）を推測し分家を探っていった。一生懸命に集めて出てきたのは二十二家であった。大抵の家は生業も次第に衰え衰退していた。旭はそれを見て嘆いて言った。「ああ、これはその初め、誰一人たりともこのようになることを予想はしていなかったに違いない。ところが今やこれ以上ないほど皆が路頭に迷っている。私の祖先が生きていたらしゃったなら、この状態を見てどうして堪えることができようか。きっと堪えられないにちがいない。」そういうわけで大金を叩いて田を買い、これを本家の男らに与えた。年々収穫量を見積り、米を実際に測り、その差額を貯めていった。まさにこれを永遠に伝え、これを一族の共有田としていった。このようにして五年が経った。一族の人々は皆感謝しこう言った。「（あなたからのご恩は大き過ぎて）どうしてもあなたの恩に報いることができない」そういうわけで我も我もとやって来て、仕事を手伝った。また、皆が言った。「素晴らしいなあ。碣（石碑）にどうして今までやってきたことを書かないのですか。書けばそれを読んで、今後この恩を受けた者が無駄をせず仕事に励み、人を慈しむ心を持った人が後に出てくるでしょう。どうか、恩を感じ、一念発起する者が出てくるように、（石碑に業績を）書いてください。」そういう次第でここにやって来て書くことにしたのだ。私は言った。「墓を修理するのは決して昔だけのことではない。夫子は禁じなかった。どのみち墓を修理しなければ、墓は廃れ、遂には滅びてしまう。そうなれば子孫は自分たちが由ってくる来る所（出自）を忘れてしまい、結果的に本（家の源・大元、興り）を貴ぶという心が衰えてしまう。昔、百世不遷の宗（嫡長子孫によって永代にわたり受継がれる本家）があった。太宗がこれである。五世がこれをもとに遷すというきまりがあった。小宗がこれである。礼は小宗太宗の廟（先祖の霊を祭る）を執り行う。そうして、宗支（本家と分家）が共に来て、一族の墓のもとでその務めを行う。昔のことではない。そうして一族を束ねるという義（人として行うべき道）がある。一族を仲良くさせる道がある。仕えることは元々古ではなくて礼の心を得る者にある。この類がこれである。今の天下は、王侯から、下は士大夫に至るまで、その生活は日に繁忙を極め、服属はだんだん上から下って来る。その親が疎ければ、疎い者はついには見てもただ道ですれ違うだけになってしまう。つまり今は勢力があったとしても、いつまでも聖人の心を持ち続けることはできない。子もそれに倣う。独りだけでなくその疎くなった者を束ねてこれと仲良くする。又、その見ず知らずの者を訪ねてこれを束ね、この人との遥かに遠くなった仲を憂える。得たこと失ったことの数々が去った結果はどうなるであろうか？世の権勢と地位のある者に、少しでもこの心を持ってもらえようようにできたならば、道德が衰え人情の薄くなっ

た世間の人にだんだん人情を取り戻してもらえるようになるであろう。願うことは、群衆がその気持ちを持ってくれることを願うばかりである。ああ、あなたはこの俗世間において世間を変えようという志を持っていた。私に^{あさな}変える力がなかったのは、この心がなかったからである。特に道を楽しみたいものだ。旭字は晨園、良くその先祖に似ている。又、文（碑文）があるので、その行った事を見ればその人となりを知ることができるであろう。文化九年（1812年）春正月 掛川教授益城松崎復記（服部光子意識文責）

6・終わりに

松ケ岡の大元を築いた山崎才兵衛（万右衛門）の出身は東山口の山崎家です。東山口の牛頭からか、または寺ケ谷かという話になりますと、意見が割れてきます。確実に言えることは、松ケ岡の山崎家の家紋「下り藤」は、牛頭、寺ケ谷の両山崎家とも共通ということで、牛頭の山崎家か寺ケ谷の山崎家かのいずれかです。

牛頭を押す説の根拠は次の3点からです。

（1）慶雲寺の碑（下の写真）に牛頭に遷り住んだとの記述がある。

牛頭には山崎氏鼻祖の墓（先述）が残っている。

（2）「山崎定地君碣陰記（1812年記）」には、「曾祖・定地君は元文初め（1730年頃）本郡牛頭村から移って来た」と書いてあります。

寺ケ谷を押す説 「松ケ岡についての冊子」より

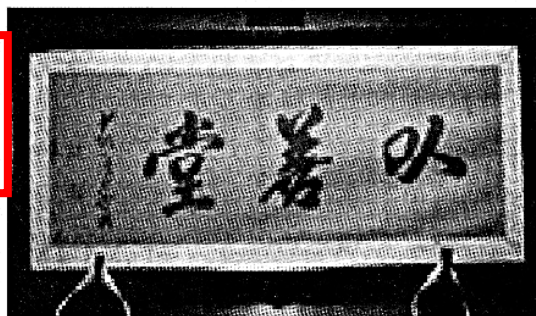
（1）山崎家の初代は掛川藩東山口寺ケ谷、山崎弥左衛門家より、才兵衛と言う人が牛頭村に分家、油や蠟燭商を営み元文の始め（1730年頃）掛川宿西町に移り 後略

つまり、寺ケ谷が本家、牛頭が分家となります。

まとめ「寺ケ谷山崎弥左衛門家より、才兵衛と言う人が牛頭村に分家」という古文書がないので何ともいえません。いずれにせよ、松ケ岡の山崎家は東山口から出たことを分かって頂けたと思います。東山口は掛川の歴史に名を残す傑出した人々を輩出した地区ということです。

山崎家の伝統と業績

山崎家の初代は掛川藩東山口寺ヶ谷、山崎弥左衛門家より、才兵衛と言う人が牛頭村に分家、油や蠟燭商を営み元文の始め（1730年頃）掛川宿西町に移り、西万と名乗り、多くの同業者、先達の存在する中、忍耐と精進、



神仏の心を以って、徳行を重ね人々から慈愍、佛子と讃えられるような商いをし、繁栄の基を築き4代晨園の頃には（1800年頃）当地の富豪西亀家を凌ぐまでになったと記実があります。

江戸期の士農工商という身分制度の時代を生き、繁栄をなした山崎家（ヤマ万）。物事には元の心があり、結果を生むと言う道理があると考えていましたが、当家には生きる拠り所、理念として「遺家訓」候文がある。内容は、親子、兄弟、子育て、暖簾、学問、大名、旗本、庶民に亘っている。

又、拠り所として「以善堂」の扁額や「従善如登 従悪如崩」「聖人之道入乎耳存乎心蘊之為徳行行之為事業彼以文辞而已者陋矣」「夫仁者天之尊爵也人之安宅也」「義人之正路也」等、柱聯があり仕事や人に対する心の姿勢を示している。「己を許す様な心で、人を許せ」と言う元の心があり、人間を大事にする生き方をした代々の當主の思いを知ることが出来ました。この事実を記録に残すべきと考え古文書を頼りに見詰め、その一端を書き留めました。

21世紀は心の時代と言われていますが、拠り所を持つことの大切さを知らされた思いです。

1 初代才兵衛を顕彰する碑

先に述べたように事蹟を追う中、初代の事は語り継ぐ文書が少ない状況でしたが、幸いにも松崎慊堂の「慊堂遺文」で定地君碣陰記の中に述べられている事で知る。

「定地君」とは、初代万右衛門、才兵衛の戒名、立戒定地居士のことである。

初代才兵衛の誕生は定かでないが、長男が正徳2年に生まれているので、成年を20歳と推定すると、元禄5、6年生まれと思う。宝暦5年に没しているので享年は65、66歳位と思える。

初代万右衛門は定地君碣陰記の中に慈しみ 愍み深く佛子の様であつたと書



定地君碣陰記の碑